

音韻 (理論・現代)

この二年間に見られた研究の動向と今後の課題は、つぎの五つに集約されると思う。①国語音韻上の理論構築は必ずしも活発ではなかったようである。発想の転換や大胆な仮説がいろいろに打ち出されることを切望する。②アクセント論は実態報告などで活況を呈し、業績も顕著であった。③実験音声学の台頭により音声学が新たな魅力を見せ、④約十年前、50年代当初に水谷修の展望した「情報工学期報処理からの接近」が今では現実味のある確実なものとなった。⑤日本語の国際化時代を反映した音声研究が目にとまった。国際化に貢献する研究が国の内外から隆盛になることを期待したい。

一

音韻論一般については、つぎの二書が出版された。一書は、翻訳のヤーコブソン、ウォー共著、松本克己訳『言語音形論』(岩波書店、昭61・3)。音の共起的諸特徴の集合・束を弁別素性といい、音調性素性、密音・散音素性が諸言語に普遍的に存在すること、素性の相互関係や階層的構造の分析が基本的な問題になること、言語研究では二つの視点となる不変性と変異性の相互作用により動態的共時態という概念が必要になることなど独自の理論を、諸説の引用も巧みに

今 石 元 久

に交えて展開している。各言語における固有的特徴を簡単に切除するなど、普遍化の過程で若干の問題も起こる(服部四郎『言語学の方法』岩波書店)が、ヤコブソン自身は、形式的普遍よりはどちらかといえば実質的普遍の考えに傾いていたのである。弁別素性の理論作りに音響学や大脳生理学の成果も積極的に援用した。ユニークな発想と卓抜した理論構築、そして、ずばぬけた博字振りは誰もが圧倒される。ヤコブソン言語学が分かりやすくなったのは長年を費やし優れた翻訳をされた訳者のおかげ。実験音声学に携わる私自身にも将来へ向けての希望と勇気を与える必携の書となった。もう一書は、染田利信『音韻論の諸問題』(人文書院、昭62・3)。先駆者クルトネ以後の音韻論の展開を分かりやすく説明し、諸問題を的確に示している。生成音韻論に至るまでの基本的な問題も示し、これから何を課題にすればよいかを分かりやすく教えている。

つぎに、論文では原口庄輔『対照音韻論の方法』(林四郎編『応用言語学講座』4(明治書院)昭61・3)があった。生成音韻論への批判もあったが、今日ではいわば普遍性の問題が生成文法の視野において改めて盛んになったと見るべきであろう。城生佰太郎の「音心論の提唱——非示差的特徴の研究——」(『言語』15・10、昭61・10)も面白かった。

独自の「音用論」と共に細部の組織化に課題は残るが、従来からの音声学や音韻論を裏返したようで発想の転換になる。音声学一般では今石の「音声学の方法(1)——その現状と課題について——」(『語文と教育』創刊(鳴門教育大学、昭62・8)がある。人文系で教える音声学は、調音音声学に傾き過ぎることを指摘し、誰でもパソコンや音響機器があつかえる客観的な実験方法を示した。

二

単音や音素を単位とする日本語における音声、音韻の具体的各論研究。現代の音韻に精通した加藤正信の説く「音韻概説」(『講座方言学』1、飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編集(国書刊行会、昭61・5)があった。加藤は、音韻には音声的特徴・音韻的区別・語例量の三面があるが、語例量に絞った方言の各音韻(担)所属語や語音韻の研究が必要であり、このような視点が方言音の比較にも必要になるという。従来になかった踏み込んだ独特の史的解釈や掘り下げるべき好テーマが随所に埋めこまれている。今後さらに、歴史的な経緯を示唆するいろいろな仮説をたくさん立ててもらえれば、現代語の音韻論が活性化するのはないかと思う。日野資純『日本の方言学』(東京堂、昭61・1)「三分野別の従来の研究と私のアプローチ(3)音韻・アクセント」では、研究の歩みと服部四郎が各方面に影響を与えたことが中心。それらを分かりやすくしたのは日野ならではと思う。加藤正信・佐藤亮一・中本正智・馬瀬良雄他の手になる『全国音韻面接調査票——主要地点方言音韻記述用——』(井上史雄代表・総合研究A(日本語音声の地域差、世代差の音韻論的音響学的研究、昭62・8)全二冊がある。全国調査の統一規程が示された。国語調査委員会編『音韻調査

報告書』同編『音韻分布図』(国書刊行会)の複製版が刊行された。

中本正智も現代の音韻に精通したかた。「音韻体系論の基本的な問題——歴史研究に資する母音の記述と比較を通して——」(『方言研究年報』29・広島方言研究所編(和泉書院)昭62・2)で、日本語の母音は音声的な特徴によって四つのバランス型と中縮型、前傾型、後傾型に分けられるという仮説を立てて、もとはi・i・e・e・a・o・o・a

のバランス型であったが、後に近畿中心の西日本では乙類が甲類に統合した五母音バランス型に変化し、東日本や日本海沿岸部では甲類が乙類に変化して中縮型へ推移したと説く。琉球列島の宮古と八重山などでは、バランス型から後傾型i・e・a・uへ推移したが、エ段音が母音iに推移して修復し、新たなバランス型になったと説く。これを、「中本の(日本語母音史)仮説」と呼んでみる。前掲加藤論文の一部に共通する点もあった。清水康行「二十世紀初頭の東京語子音の音価・音訛——活語レコードを資料として——」(築島裕博士還暦記念国語学論集・築島裕博士還暦記念会編(明治書院)昭61・3)他は、明治36年〜44年までに録音・発売された東京落語家のレコードを資料にして当時の東京語の子音や母音を詳細に調べたもの。「東京都言語地図」(東京都教育委員会・61年3月)、大島一郎編「八丈島方言における言語変化——共通語化の側面を中心にして——」(東京都立大学国語学研究室、昭62・3)などに収められた手堅い音韻・アクセント研究もあった。

ところで、方法論で注目されるのはつぎの諸論文。F・C・C・パン「方言に残る古代日本語の音韻」(前掲『方言研究年報』29)では史的言語学における内的復元法を使って、理論的裏付けによる三つの鼻音+阻音の合体(cluster)を復元し、古代の日本語にmb・nd・ngのような鼻音そのものを表す子音音素があり、語頭にくることが

あつたと説く。なお併せて、語頭の鼻音が高知県下にあるとの柴田武の指摘〔幡多方言〕10、昭35も参照したいところ。松本克三「通時的にみたことばの記述——歴史言語学の原理と方法——」(前掲「応用言語学講座」)は、パン論文と揆を一にするもの。日本語のような系統の分からない孤立言語の場合でも内的再建が不可能でないという。穏当な考えが随所に輝く好論文。福島直之の「音配列論序論」(横浜国立大学人文紀要)2・33、昭61・12)は「広辞苑」を使って母音連続

の傾向を調べ、普遍的音配列論を導く労作。ところで、アクセント論では服部四郎、金田一春彦、平山輝男他諸家において研究上の標榜が常に明確化されてきた。服部音韻論は別としても、今の音韻論は論点が曖昧になっている場合が多いと思う。右の諸論文は、近年低迷気味の国語音韻論に対するよい刺激剤になればと思う。音韻史へ迫る若干の傾向を呈していたが、全般的に見れば、国語音韻論は理論的迫力を欠いていたと思う。

三

韻律的研究・アクセント論。この方面は、群を抜いて盛況であつた。多数の論文が発表されたが、以下には僅かしか採り上げられない。秋永一枝の「アクセント概説——史的变化と方言分布——」(前掲「講座方言学」)は、日本語アクセントについての研究課題や論点があるの初学の者にも分かりやすいであろう。奥村三雄の「アクセントの変化——アクセント型式と所属語彙の問題——」(宮地裕編「論集日本語研究2 歴史編」明治書院、昭61・11)もある。各型式の語彙的負担に重点を置いたアクセントの史的考察。馬瀬良雄は「論集日本語研究10・方言」(有精堂、昭61・1)で平山輝男「日本語アクセントの将来」他を

再録して研究上の便宜を図つた。

さて、上野善道「伊吹島方言のアクセント核の担い手」(東京大学言語学論集86)昭61・12)は、早田輝洋「アクセントの単位——特にその担い手について——」(九州大学文学研究)83、昭61・2)に対して反駁したものの。上野は、伊吹島方言自体モーラである、促音だけ例外で「ン、イ」は核を担うと説く。食い違いが生じるのは、早田が全体に音節単位の立場であるのに対して上野はモーラ単位の立場であるからという。いずれにしても諸方言のアクセントの単位がモーラか音節かは気になる根本的問題。伊吹島方言に限らず各地全国的規模において論究を重ねてもらいたいと思う。上野善道は「第一次アクセント」の段階を保持する方言アクセントの網羅的記述にのりだし、「香川県伊吹島方言のアクセント」(日本学士院紀要)昭61・2)を纏めた。従来の低起式、高起式のほかにそれらと対立する式を新しく「下降式」と名付け/で表した。話題の再提供。他方、早田輝洋にやや啓蒙的な「アクセント分布に見る日本語の古層」(言語)16・11、昭62・6)があつた。東京式はピッチの下がり目の位置が有意味、西南九州式は単語全体が下降で終わるか上昇で終わるかという声調が有意味、京阪式は位置と種類を兼ね備えていると説き、日本列島上に東を中心とするアクセントが、西を中心とする声調がそれぞれ分布している、このような諸方言に日本語の古層を考えたと解釈した。近隣諸言語のアクセントや声調も考慮に入れた年来の持論によるものと思われる。山口幸洋には、一型式と五型式(京阪式)がそれぞれ分裂し干渉し合つて今日のアクセント体系ができたという持論があり、「四国西南部東京式アクセントの性格」(前掲「方言研究年報」29)では幡多アクセントも一型式→二型式になったその後の内部分裂と

考えて、中国地方と同じ、「中輪式東京アクセントであること」を語と文節の両面から明らかにした。同じく「東京下町方言のアクセントチュエーション」(「音声言語」II・近畿音声言語研究会、昭62・11)では一歩進めた新概念の発表。情緒的部分のイントネーションと非情緒的部分のアクセントを合体する観念をアクセントネーションという。それは、語アクセントの具体的表現であり、節づけであると言く。屋名池誠「述部のアクセント——現代東京方言述部の形態——構文論的記述(3)——」(「学苑」へ昭和女子大学、昭62・9)は、述部アクセントが表層核において、一アクセント単位に一つという頂点機能を持ち、述部の諸要素を膠着させるという。真摯な論文。その他「言語」15・8(昭61・8)などで秋永一枝、服部四郎、金田一春彦にアクセント論争があった。

地域を絞った調査研究では、次代を担う研究者たちのものが多かった。添田建治郎「萩市見島の方言アクセントをめぐる」(「国語学」148、昭62・3)は、名義抄式以後の諸系譜における見島本村(在)アクセントの位置や性格を明らかにした。相当数の論文諸説を凌駕しながら、中国と九州の狭間からアクセント系譜全体への展望を開いた意欲的な論考であり、方法的にも示唆に富む。佐藤栄作の「香川県高瀬アクセントについて——三野町大見の体言のアクセントから——」(「山手国文論叢」神戸山手短期大学国文学科、昭61・1)は、古代↓伊吹島↓観音寺↓高瀬↓丸龜↓高松という史的系譜を睨んでの力作。アクセント型所属語彙の精力的な記述も盛んで、一つの潮流を形成してきた感がする。前掲の上野善道論文の他、中井幸比古には「現代京都市方言のアクセント資料(1)」(「アジア・アフリカ文法研究」15、昭62・3)の労作があり、その後私家版でその(3)も出た。同じく「京都旧市

内における若年層のアクセント(1)」(「国語研究」50・国学院大学、昭62・3)他もあった。精力的な成果がいずれは大きく纏められるのであろう。新田哲夫には上野善道との共同成果「金沢方言の名詞のアクセント資料——4モーラ語(2)」(「金沢大学日本海域研究所報告」18、昭61・10)他があり、北陸の一部にある「ゆるする」独特の音調に音響的分析をするなど意欲的な研究が進行中。都染直也に「アクセント型所属語彙の世代差について——姫路市の形町方言における1・2拍体言——」(昭和女子大学国語国文研究)創刊・昭62・12月)他があり熱心な研究が進行中。崎村弘文に力作「与論島方言のアクセント体系」(「鹿児島大学文科報告」22・1、昭61・9)他があった。

馬瀬良雄・佐藤亮一「東京語アクセントの多様性の実態とその分析——標準アクセント選定のために——」(特定研究・言語の標準化総括班木下是雄代表「情報化社会における言語の標準化」昭61・3)は、既刊柴田武監修・馬瀬良雄・佐藤亮一編「東京語アクセント資料(上)」「下」昭60・2(柴田・馬瀬・佐藤とコンピュータ処理に携わった沢木幹栄他のチームプレーが見事に結実した歴史的価値を持つもの、見出し語約一二八〇〇語からなる)に収められた膨大な資料に基づき、標準アクセント選定の方法について研究した労作。つづきは「日本方言研究会」(昭62・10)で口頭発表。二十一世紀にはどのような変貌が見られるか、興味津々である。

四

音響音声学・生理音声学・知覚心理などを一括し実験音声学と呼ぶ。城戸健一は、音響学界における重鎮。その「音声の合成と認識」(オーム社、昭61・9)は音響学の成果を平易に説明した書である。

その高弟、粕谷秀樹に「音声研究における機械の役割」(「言語生活」422, 昭61・1)があった。粕谷は今ほど音声技術者と言語・音声学者や心理学者との協調が必要なきはないという。

さて、前川喜久雄の「音声の音響的研究の文献」(前掲「方言研究年報」29)は音声の音響的研究に関する入門書と代表的な文献を紹介したもの。概説書・入門書、基本的・専門的研究、音響音声学を言語体系の研究に応用した研究、に分けてある。実験音声学に関心を寄せられる方に一読願えればと思う。文献整理のおかげで研究がやりやすくなるというもの。音韻やアクセントに関しても研究内容などの組織的な整理を是非していただきたい。今石の「日本語方言音声の音響学的分析資料集」(出雲方言の音声および琉球方言の音高——(鳴門教育大学言語系国語学教室, 昭61・3)は、特色音声の資料保存。佐藤和之「方言音韻の実験的研究試論」(前掲「方言研究年報」29)は実験音声学における方法を説いたもの。論証法からの検証的研究とスペクトル分析などの研究方法を持つ研究とを兼ねあわせることが大事であるという。つぎの、素晴らしい論文も展覧期間の目玉であった。

一〇、高安芳雄「言語音の行動について——文章内における音声の組成……その基本的原理に関する試行——」2・4 (愛知大学文学会文学論叢) 81, 同82・83, 同84, 昭61・3, 11同62・12)は、平家物語における膨大な母音数を集め統計的に処理した労作。藤崎博也と杉藤美代子の行った5母音の F_1 と F_2 の周波数値を、今日でも評価が高いBekesyの理論(Space Pattern Theoryでノーベル賞受賞)により内耳基底膜位置に振り当てたところ興味ある母音体系図が得られたという。文章内の母音・子音についての普遍的法則の探究を先鋭的、かつ計画的に推進する目的の放せない多彩で有為の研究者。二つ、高名な藤崎博也に

「共通語音声の地域的変動の分析と標準化の方策」(前掲、特定研究「情報化社会における言語の標準化」)他多数の論文があった。フォルマント周波数の抽出では藤崎自らが世界に先駆けて完成させたAnalysis-by-Synthesis法(A・b・S法)を駆使し最高の精度を達成した。諸考察の結果により、アクセントの異なりを縦軸に、 u/v 母音の東京から各地域への距たりを横軸にし、大阪、高知、那覇における20年後の標準化の方向を矢印で予想した。三つ、三輪譲二に「パソコンを用いた初心者熟練者用対話型音声分析システム」(電子通信学会技術研究報告「電子通信学会, 昭61・9)他があり、人文系のもも手軽に携えるスペクトル分析法を開発した。パソコン(NEC-9800シリーズ)、デitel(株)のA/D・D/A変換器等とソフト(MIWA INSAS)によりAnalysis-by-Synthesis法(A・b・S)の線形予測法(LPC)・ソナグラフ分析などが、マウスやタッチスクリーンで初心者にも簡単にできるといふ画期的なもの。希望が多ければ市販化の可能性もある。四つ、東京大学医学部音声医学研究施設・通称東大音声研でこころみられた研究。Nimi, S. et al (1986): "A Preliminary Report on the Tongue Dynamics of Dysarthric Patients." Ann. Bull. RILP No. 20, 205-210.は舌の運動を超音波診断装置とコンピュータの画像制御によつて分析した画期的なもの。X線撮影が禁止された今ではこれが最適であろう。杉藤美代子の国語学における実験的なアクセント研究開拓時代のころに比べ、技術革新の最近では、実験音声学的研究を歓迎する傾向もあるように思う。それも、携わるものとしてはたいへん嬉しいことであり、電子工学から藤崎博也、東大医学音声研から広瀬肇施設長・桐谷滋他、また情報工学から三輪譲二など多彩な方々の国語学界や言語学界への歩み寄りとその業

績に負うところ大である。

今石元久・三輪讓二・佐藤和之・吉田則夫・大橋勝男・加藤正信「方言音声の変容過程の分析に基づく5母音の標準化について」(前掲、特定研究「情報化社会における言語の標準化」)は、全国の中で青森県五所川原市、宮城県多賀城市、新潟県北魚沼郡広神村、富山県西砺波郡福光町、島根県簸川郡斐川町を選定し、調査票・収録法・スペクトル分析法なども統一して、情報化の波を受け特色音声が崩壊していく過程を分析的に克明にし、それと表裏する自律的な標準化の実態を把握した。副産物とも言える男性アナウンサーと各地老人男性の母音に関する F_1 、 F_2 の図は、今後の母音のスペクトル分析で種々参考にされるであろう。関連して、佐藤和之「津軽方言母音の音相実態と標準語音化に関する一考察——五所川原市方言話者老年層と若年層との対比より——」(弘前大学人文学部「文経論叢」22・3、昭62・3)があった。ところで、日本音声学会「音声学会会報」はこの期間(昭61〜62年)も順調に刊行された。小論文をたくさん集めているが、同185号の橋本清舌位置とフォルマント周波数との関係、186号の大西雅行「動態人工口蓋による日本語子音の考察」などが目についた。今後とも会報の一層のレベルアップを期待したい。

実験音声学の分野の最後になったが、杉藤美代子の研究活動も活発であった。杉藤は、主催する「近畿音声言語研究会」の研究例会を二年間で六回開き、成果を「音声言語」II(昭62・11)に纏めている。掲載された本多清志「母音の音調と声の高さとの関連性——ピッチ調節作用の声道形状に及ぼす影響——」は、声の高さと母音の調音との関連性をもたらす生理学的メカニズムを調べた興味深い論考。大飼隆「近畿方言の若年層のプロミネンス」は、近畿方言話者の頭高型アクセ

ント名詞におけるプロミネンスを調べたもの。面白さはあるが、調査法が今後の課題であろう。M. E. Beckman, J. B. Pierrehumbert「東京語の音調構造」、三浦一郎「親と子の音声の類似性」他、北沢茂良論文、平藤暢夫・渡辺真一郎論文、前川喜久雄論文など優れた論文が多数収められている。杉藤自身の論文は「談話におけるポーズの持続時間とその機能」。談話における発話とポーズの時間関係の実態を極めて詳細に実験的に分析した。聞き手のあいづち・うなづきは、発話者のポーズの時間を大きく乱さないなど、意外な結果が見えられた。同じく「ポーズとイントネーション」(「談話行動の諸相座談資料の分析」国立国語研究所(三省堂)昭62・6)では(船場のことば)などの発話とポーズ、発話速度の関係、イントネーションの役割を緻密に測定分析した労作。話し上手の話者ではポーズの時間関係が変化に富むことなどを客観的に示し、実験的ではあるが談話行動に密着した人間の結果を多数導いた。その他にも「ニュースの報道における発話時間及び休止時間と発話速度——「サケ・マス交渉」の場合——」(「樺蔭国文学」23、昭61・1)など、大車輪の活躍。

五

教育関係。林四郎編「応用言語学講座・2」(前掲)は、近年の熱烈な日本語教育ブームに専門的角度からの学理を与える時機を得た刊行であった。杉藤美代子「アクセントのとらえかた」は、英語話者と日本語話者による主に英語発話における韻律的特徴の違いを解明した労作。ここにも発想の転換を見た。英語のアクセントは文章中重要単語を示したり、新情報を指示したりするが、日本語のアクセントはそれに比べて単語レベルであるが故に情報伝達の効率から

いえばやや機能的に劣るのではないかと考える。その他松野和彦「英語と日本語の音声・音韻の対照研究」〔『日本語学』10・6、昭62・10〕も目についた。今後の国語学研究は、国際化に資する主体的視点を持つことが最も望ましいと思う。そして、他方では諸外国から見た日本語に関する専門的知見もほしい。日本語の国際化を考える好材料になる。同書「応用言語学講座・2」所収の蔡茂豊「有気音と無気音との対立——私の見る日本語——」は中国人学習者が日本語のp・t・k行音を発音する場合、息を弱めに短く出して発音する心得の根拠を明らかにした。明晰な好論文。NHK編「日本語発音アクセント辞典・改訂新版・音声ガイド」(カセットテープ付、昭61・11)は、後藤美代子・秋山和平アナウンサーの声が吹き込まれている好改訂版。金田一春彦言語監修・関弘子朗読「朗読源氏物語——平安朝日本語復元による試み——桐壺／夕顔／若紫／須磨」(カセットテープ二巻十解説書へ大修館書店)昭61・6)が出た。前回のレコードが廃盤となったので助かった。隣の中国の音韻史では平山久雄が唐代音の復元を試みている。

柴田武「柴田武にほんごエッセイ」1(大修館、昭62・12)は、音声についてもわかりやすく説いている。

学会活動。日本音声学会では、平山輝男新会長のもとに体制が整えられ、上田萬年会長以来の伝統ある学会の活性化が図られようとしていることを特筆しておきたい。篤学の山口幸洋が新村出賞を受賞された。杉藤美代子が中心となり、関西で「国際化・情報化社会における日本語音声の研究と教育」というテーマのもとに、野地潤家、柴田武、藤崎博也の講演・杉藤美代子司会、秋山和平、板橋秀一、上村幸雄、早田輝洋、水谷修、宮地裕が提題者となったシンポ

ジウムが開催された(昭62・11)。一般の人々も含め二百名余りの参加者があった。他方では佐藤亮一が「方言」〔『国語年鑑』62年度版(国立国語研究所 秀英出版、昭62・12)〕でも指摘したように、われわれは方言音声の永久保存を真剣に考えるべきである。数千年来の無形文化財と見做される特色音声はこの国土上から急速に消え去ろうとしている。カセットテープなどに収めた音声資料は、20年ごとに複写を繰り返し、儼が生えないよう風通しの良い所で保管しなくてはならない。複写ごとに音声の品質が劣化する。国家的援助金を導入し、科学技術の粋を結集して、CD音声辞典を作るなど学界における緊急課題に早速に取り組むべきである。かつて国語史上にも例を見なかった音声言語完全資料の永久保存への取り組みを切望する。ごく最近のCD試作、板橋秀一・日本電子工業振興協会「日本語共通音声データ(地名)男性・同女性」(見本品)のあることを紹介しておく。

紙幅も限られているので概説的・啓蒙的なものは略述に従い、現代語を対象にした研究を中心に据えその動向と課題を見てきた。なお、他領域との重複や見落としなど、気のつかなかった点も多々あるろうかと思われるが、なにとぞご容赦いただきたい。

—— 鳴門教育大学教授 ——